

# 延吉農村における朝鮮族の移動性と農地の流動化

Mobility of Chaoxianzu and land transfer in rural Yanji

小島泰雄

Yasuo KOJIMA

延吉農村は中国東北地域の吉林省東端、北朝鮮国境に接する延辺朝鮮族自治州の州都周辺に位置する。この地域は近代以降に開発が進められ、とくに朝鮮半島からの移民が多く定着している。彼らは朝鮮族と呼ばれ、中国の少数民族の一つに指定されており、朝鮮半島情勢の影響を強くうけてきた。近年では、韓国の経済発展により、韓国と中国国内への出稼ぎを多く送り出している。本論文は、2014年の夏季に実施したフィールド調査で観察・収集した資料をもとに、朝鮮族の移動性を集落および行政区域レベルで概観したうえで、近年活性化している農地の流動化について外来漢族の動きに注目して記述し、地域像の更新を目指す。

キーワード：中国東北、朝鮮族、移動性、農地、延吉

Key words : Northeast China, Chaoxianzu, mobility, arable land, Yanji

## 1. はじめに

小論は2014年に行われた延吉農村のフィールド調査に基づいて、先行研究と資料を参照しながら、延吉農村の現状とその形成過程について記述的に考察することを目的とする。フィールドで収集したデータに依拠した記述が主体とならないのは、調査の様態とかがわっている。

フィールド調査は8月9日から25日までの2週間あまり、中国の東北地域に位置する延吉とその周辺で行われた。延吉は延辺朝鮮族自治州の中心地である。延吉が少数民族地区であることと、国境地域であることは、私たちのフィールド調査を制約することとなった。現地政府の協力をうけることができず、活動そのものを慎重に進めることが必要となった。カウンターパートである中国科学院東北地理与農業生態研究所の張柏氏と、現地での調整を担っていただいた延辺大学の金石柱氏のご尽力により、中国側研究者と日本側研究者が一緒に活動するという前提のもと、参観的な活動を軸としながら、付随して景観観察や聞き取り調査を行うというものであった。私の活動には、中国科学院地理科学与資源研究所の魯奇氏に常に同行いただいた。期間前半には岡山大学の金料哲氏が加わり、金石柱氏とその指導する大学院生李花氏、そして張柏氏に機動的に同行いただいた。学術研究という目的を共有することで、困難なフィールド調査に最大限の協力をいただいた各氏に、記して謝意を表します。

農村のフィールドは、龍井市東盛涌鎮、延吉市朝陽川鎮、図們市涼水鎮の3カ所である。龍井市は延吉の南に隣接し、調査村は延吉市中心から10kmほどに位置する。図們市は延吉の東に隣接し、調査村は延吉市中心から40kmほどに位置する。朝陽川鎮は景観観察を中心とした1日のみの参観であったが、他の2つのフィールドには通算で3日あまり通い、村幹部や農民の話の聞くこともできた。なお朝鮮族の聞き取りは主に朝鮮語が用いられたことから、同行者による中国語訳によってノートをとっている。

## 2. 延吉農村の農業と人口

平地の水田と丘陵・山地のトウモロコシ畑という農地の使い分け、そして傾斜変換点に集村をなして分布する集落。これが現在の延吉農村の景観が呈する基本構成である（写真1）。

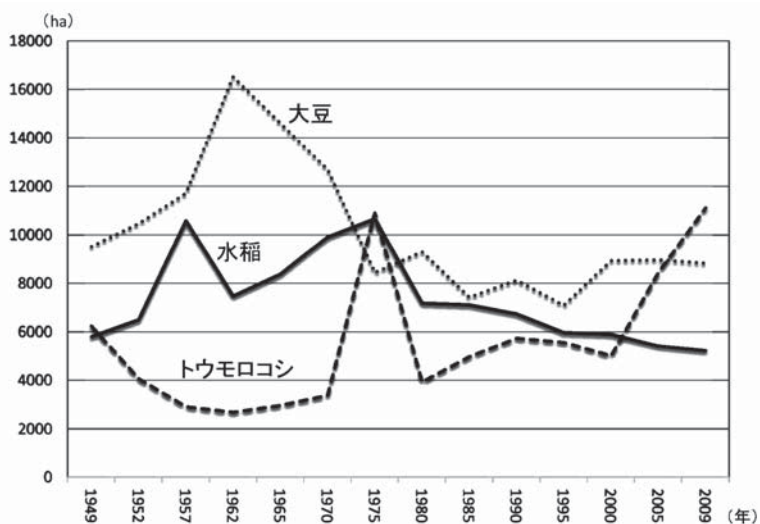


写真1 延吉農村の景観

延吉は吉林省の東部、長白山脈の中北部、図們江流域の盆地に位置している。年平均気温は5度と冷涼であり、1月の平均気温は $-10^{\circ}\text{C}$ を下回る厳しい寒さであるが、7月の平均気温は $20^{\circ}\text{C}$ を上回り温暖な夏となる。年降水量は540mmと多くはないが、その8割は夏に降る<sup>1)</sup>。

こうした地形と気候の下で、延吉農村においては1年1作の稲作と畑作が行われている。その農業の変遷について、延吉市街地の南にひろがる農村地域である龍井市の穀物播種面積に関する統計をみてゆこう（第1図）。

このグラフから読み取ることのできる1949年から2009年までの60年間の龍井農業の変遷の特徴は、一つの作物が絶対的な位置を占めることなく、水稻・大豆・トウモロコシが相互に関連しつつ、同時に個別の動きを示してきたことである。



第1図 龍井市における播種面積の変遷（1949-2009）

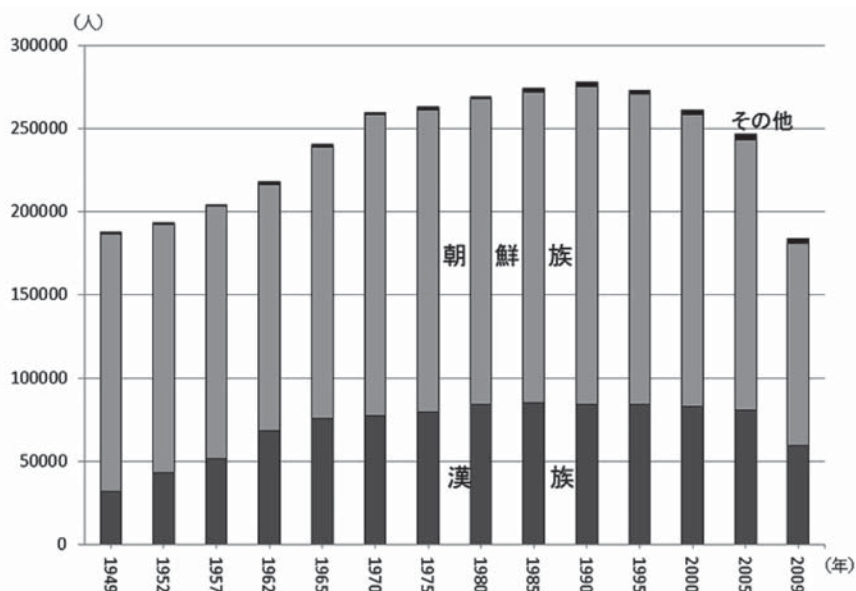
資料：龍井市統計局編 2010.《奮進的龍井》，pp56-61.

水稲は集団化期に 10,000ha まで播種面積は拡大したが、生産請負制の下では漸減傾向にある。現在の水稲の播種面積は、60 年前の水準を下回っている。東北地域の重要な商品作物である大豆は、水稲と類似した推移を経験しているものの、それなりの面積で栽培されている。そしてトウモロコシは 1975 年の突出を一つの契機として、増加傾向にあり、とくに補助金が投入されるようになる 00 年代から急速な伸びを示し、現在では最大の播種面積を持つに至っている。

穀物播種面積の合計すると、水稲・大豆・トウモロコシ 3 種の栽培面積は 60 年間で 2 万～2.5 万 ha で横ばいであることが注目される。1970 年代まで 2 万 ha ほどあったアワやコウリヤンなどの雑穀の播種面積が 1980 年代以降はわずかしか計上されていないことを勘案すると<sup>2)</sup>、農地の拡大を通して実現される農業の拡大は人民共和国期の龍井には観察されず、フロンティアの性格を有する東北農村にあつては、延吉農村は開発の早い部類に属することがわかる。すなわち、20 世紀前半までに農地開発が進み、20 世紀後半の農業は、主に生産性の向上を軸に展開したことを物語る。

人口の変遷は、農業変遷とはすこし異なる地域の履歴を示している。延吉農村の人口変遷を龍井市を事例として検討する。(第2図)。

龍井市の総人口は 1949 年の 18.7 万人から 1988 年の 27.8 万人に 40 年間に 5 割近く増加している。確かに社会主義建設期には急速な人口増加がみられたわけであるが、同時期に人民共和国全体で人口が倍増したとと比較すると、この伸びは低調である。さらに、1990 年代になって人口が減少に転じていることも目を引く。グラフ末尾の急減は 2009 年 1 月に朝陽川鎮が延吉市に併合された行政区画変更による影響が大きいのが、郷鎮レベルの人口推移で確認すると、基調としての人口減少はこの期間にも観察される。



第2図 龍井市における人口の変遷 (1949-2009)

資料：龍井市統計局編 2010.《奮進的龍井》，p.38。

龍井市は朝鮮族の自治区である延辺においても朝鮮族の比率が大きい市県である。その民族ごとの人口変遷をたどると、朝鮮族と漢族はともに1970年以降は安定的に推移していたが、1990年代になって朝鮮族の人口減少が顕著となった。これは朝鮮族の自然減と社会減が相乗的に形成した状況である。すなわち朝鮮族が計画生育に早くから取り組んでいたことによる少子化と、子育て期の人口とくに女性が流出していることによる直接的・間接的な人口減少として整理されている<sup>3)</sup>。この背景には、朝鮮族女性の教育水準の高さが指摘されているが、「先進国を背景にもつ唯一の少数民族」としての国内・国外における豊富な就業機会が前提となることは言うまでもない。

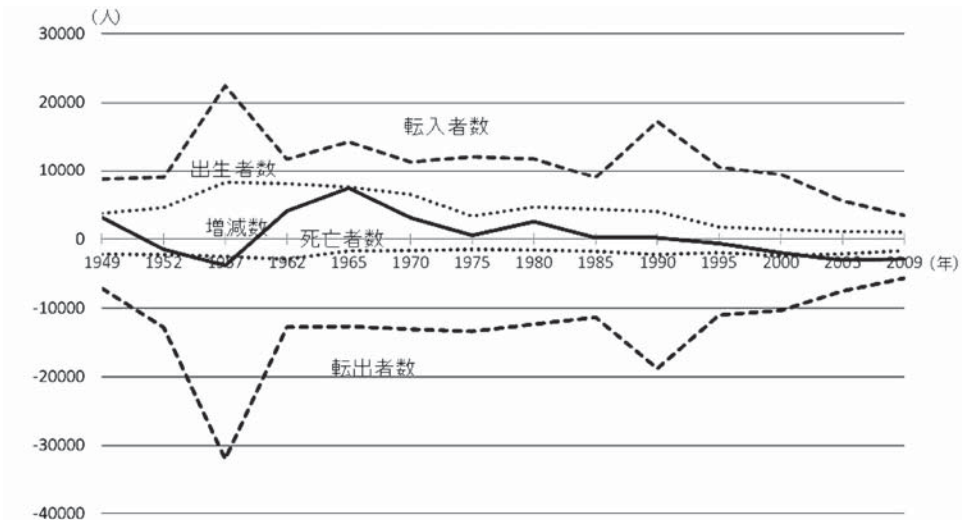
第1表は延吉農村の状況として、龍井市の出国者統計を整理したものである。2000年代後半においては韓国への出国が圧倒的多数であり、そのほとんどが出稼ぎと考えられる。

第1表 龍井市の出国者統計 (2005-2009)

	2005	2006	2007	2008	2009
韓国	13,095	16,354	21,802	12,651	7,246
ロシア	0	0	7	9	16
日本	70	10	5	8	13
北朝鮮	18	15	10	7	10

資料：龍井市統計局編 2010.《奮進的龍井》，p.221。

さらに人口増減の内訳をみると（第3図）、龍井市では人民共和国期に一貫してそれぞれ1万人を越える転出者と転入者がみられ、その収支である社会増減はほとんどが社会減となってきたことが注目される。朝鮮族の人口が減少する1990年代以降には、人口減少にともなって出生者数・死亡者数が縮小するだけでなく、転出者数・転入者数も漸減している。人口変動が縮小する中で人口減少が続いているということは、地域の活力が低下していることを示すとみなされる。



第3図 龍井市の自然増減と社会増減（1949-2009）

資料：龍井市統計局編 2010.《奮進的龍井》，p.39。

### 3. 朝鮮族の移動性

東盛涌鎮の朝鮮族が暮らすある集落では、1990年代に40戸あまりあった農家が半減し、実際に住んでいる世帯は10戸余りとなっている。家屋の多くは空き家となり、取り壊されたものも少なくない。居住者として残った者に若者はわずかであり、60歳以上の高齢者がほとんどである。こうした集落の縮退によって、集落の空間的な再編が進められている。また、新たな村外者が実際に居住しながら、彼らの転入を制度的に阻む戸籍と農地の集団所有が存在することから、集落縮退に伴う村民小組、すなわち現地では生産隊という慣称がなお使われている村民組織の合併が行われている。

涼水鎮のある行政村は2つの集落からなるが、村民小組は7から5へと減少している。朝鮮族と漢族がともに暮らすこの行政村は、かつては800人が暮らしていたが、朝鮮族の流出により人口は半減し、朝鮮族と漢族の比率は7対3から3対7に逆転している。

以上の2つの事例は、フィールド調査において村幹部がわれわれにまず紹介してくれた地域の概況である。前章において集計レベルで考察した朝鮮族の減少は、個別具体的には集落の縮小、村落社会の衰退として現れているのである。この農村変化の動因が韓国の経済成長にあること



や、韓国への出稼ぎが朝鮮族の人口流出を生み出している機構は、フィールドにおいてしばしば言及される認識であった。

涼水鎮のある集落では労働力の半数が韓国に行ったことがあり、60歳以下で病気でない者は韓国に行ってしまった、と誇張を含みながら語られることさえあった。また、子どもを産んだばかりの若い女性は、この子が2歳になったら夫と一緒に韓国に出稼ぎに行くつもりであり、しんどいけれども出稼ぎを4年ほど行って、帰国したら近くの図們の街にマンションを購入するつもりである、と将来像を描いていた。

こうした1990年代からの朝鮮族の移動性の上昇は、20世紀前半までの朝鮮族が帯びていた移動性とどのように結びつけて理解することができるのであろうか<sup>4)</sup>。限られた聞き取りという留保は必要であるものの、集落の歴史については、伝聞として満洲国期の建村について回答されたのが最も詳細な情報であり、家族の歴史にしても、80歳になる父の代に汪清から移動してきたが、もとは咸鏡北道からやってきたと伝えられる程度で、時期は不詳とする。漢族社会で重視される歴史の中に自らを定位する発想が薄いのは、民族的な文化にかかわるものであるか、あるいは移動性高い社会の特性であるかについては、なお考察が必要であろう。その手がかりの一つは、朝鮮族の多様な出自、多様な移住過程を反映して、涼水鎮のある集落では、集落の大姓である金家、朴家、李家は、姓こそ同じであるが、それぞれ同一の同族ではないとされることに見出される。

ここで地名録を手がかりに龍井市東盛涌鎮の集落史を総覧しておこう<sup>5)</sup>。

『龍井県地名志』は1980年代前半に行われた地名センサスで収集された情報をまとめたものである。収集された地名には、川や山といった自然地名も含まれるが、主体は集落名称であった。地名の標準化を目的としたセンサスにおいて、集落については単にその表記と読み方のみならず、位置、地勢、人口や経済の状況、そして集落史が記載されている。集落史としてほとんどの集落に共通して記載されるのは、建村についてである。建村記載は年号やおおよその時期が言及されるに止まることから、その多くが伝承を引いたものと考えられるが、センサスが多数の現地調査者によって実施されたものであることから、一定の信頼性があると考えられる。

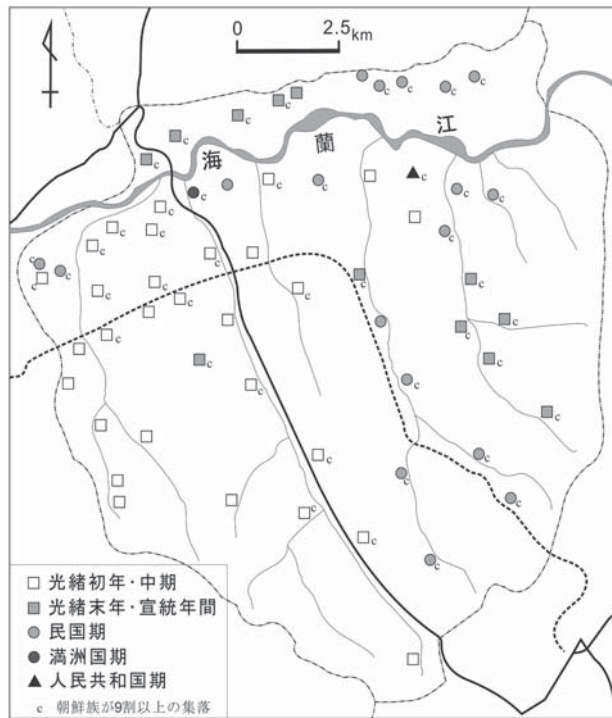
地名録の総説で述べられるように<sup>6)</sup>、中国東北地域は清朝発祥の地として「禁山囲場」され、当地も「南荒囲場」と称され、清朝になって200年あまりは満洲族以外の居住が制約されていた。18世紀中葉に朝鮮から「朝耕暮帰」「春耕秋帰」という出作りの形態で越境耕作が始まり、同治八年(1869)から翌年にかけて朝鮮北部で発生した飢饉では、家族をあげて図們江を越えて当地域に入ってきて、生存をはかる者が出たとされる。19世紀後半になると吉林の移民制限が緩められ、光緒七年(1881)に延吉に移民を管轄する分墾局が置かれている。

地名録には東盛涌鎮にある61集落すべての建村についての記載がある。最も古く集落が成立したとするもので光緒初年であり、当地の現在に連続する居住は100年あまりの歴史しか有さないことがわかる。それを19世紀末の「光緒初年・光緒中期」(29集落)、20世紀初の「光緒

末年・宣統年間」(12 集落)，民国期 (1911-1931, 18 集落)，満洲国期 (1932-1945, 1 集落)，人民共和国期 (1 集落) の 5 期にわけて示したものが第 4 図である。

この地図に現れた当地の開拓過程は，龍井県城に近い西側から開発が進んだ状況である。西半に位置する集落は 19 世紀末の光緒初年・光緒中期の建村とするものがほとんどであるのに対して，東半と海蘭江の北側は光緒末年，宣統年間，民国期が多い。ただし民国期といっても 1910 年代が多く，20 世紀初期に当地の集落については基本的な構成が出来上がったと考えられる。

また興味深いのは，龍井市は朝鮮族が多く暮らす地域であるが，その朝鮮族が 1980 年前半に集落人口の 9 割を占めている集落は，20 世紀になって建村された集落が多く，19 世紀にすでに建村されていた集落では，漢族が一定の割合で朝鮮族とともに暮らしているものが 4 割を越えている。集落の基本構成が完成する 20 世紀前半まで，朝鮮族が継続的に流入していたのに対して，漢族の流入が主に 19 世紀の事象であったことが，分布から推定されるのである。この推定が仮説の域を越えるためには，個別の集落における建村以前，建村以降の居住史に関する実証的研究をまつことは言うまでもないが<sup>7)</sup>，延吉市志において，山東・河南の農民を受け入れる南崗招墾局 (1881 年) に続いて，朝鮮の農民を受け入れる越墾局 (1885 年) を開いたとする記載があることを<sup>8)</sup>，指摘してきおきたい。



第 4 図 龍井市東盛涌鎮の集落の建村時期  
太い実線は道路，破線は鉄道，一点鎖線は鎮境界

資料：龍井県地名委員会編 1985.『龍井県地名志』 pp.87-98。

このように延吉農村は19世紀末から開拓が進められた地域であり、一般に移動が制限されていた人民共和国期においても人口の移動は続いていた。21世紀への転換期において活発化した朝鮮族の流出は、こうした延吉農村の有する移民社会的性格と結びつけて理解することも大切であろう。

#### 4. 農地の流動化

朝鮮族の流動化は、農地の流動化を生んでいる。朝鮮族の村人は、若い労働力はほとんどが出稼ぎに出ており、村に残っている高齢者も農業に従事する者はわずかである。東盛涌鎮でも、凉水鎮でも、「この集落では朝鮮族で農業に従事しているのは1戸だけである」という語りに出会った。そして老人たちが日がな一日、集落の亭子に集まって談笑する姿は、朝鮮族集落の特徴的な景観となっている。一方、夏の農村における景観観察では、農地にはトウモロコシや水稻、大豆などの作物が育っており、耕作放棄された農地は少数であった。すなわち集団から農地を請け負っている農民と、実際に農業を行っている農民の乖離が生じていると考えられるのである。このことを農地の流動化の側面から検討してゆくこととする。

まず誰が農業を行っているのか、について聞き取りを整理してゆく。いずれの集落も朝鮮族だけで構成されているわけではなく、漢族が一定数、居住しており、彼らが朝鮮族の農地を借りて農業を行っている。漢族は朝鮮族のような韓国にかかわる出稼ぎ先がないことから、集落に残っている者が比較的多い。しかし、従来から居住している漢族によって朝鮮族に配分された農地がすべて耕作されているのではないことは、いずれの集落でも共通していた。すなわち村外から漢族農民がやってきて農業を行っているのである。

東盛涌鎮のある集落で、水田3.5垧 (shang, 1ha) と畑2垧を大規模に経営する在住の漢族は、自らの請け負い農地 (水田6畝、畑1.6畝) のほかに、水田は1畝400元、畑は1畝300元で朝鮮族の農家から農地を借りている。2011年から借地するようになり、次第に面積を増大させており、2台の田植機とトラクターを使う機械化を進めている。また収穫には付近の漢族が所有する、あるいは外部からやってくるハーベスターを雇っている。彼によれば、集落には吉林省西部の松原市や延辺自治州南部にある和龍市からやってきた漢族が、集落の半分以上の農地を借りており、近隣集落の農地を含めて大規模な農業経営を行っている。彼らは、おもにトウモロコシを作っており、農地の賃貸料を低下させない効果があるとの評も聞かれた。

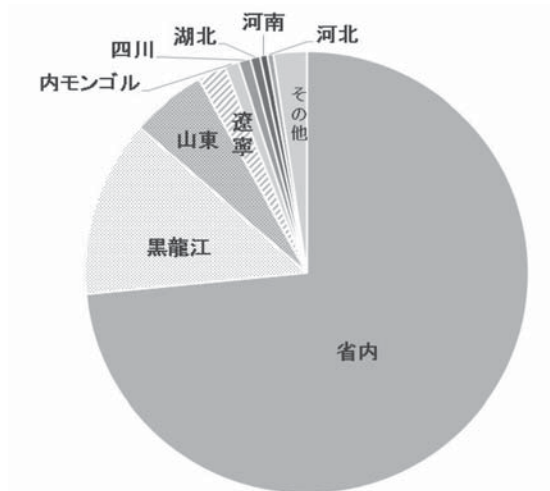
凉水鎮のある集落に、黒龍江省チチハル市訥河から2013年にやってきた農家は、1年目に25.5垧、2年目に50垧あまりを借りて、トウモロコシの大規模な栽培と、エゴマ、小豆、瓜といった商品作物の栽培を行っている。この農家の妻の親戚が1980年代に隣村に來住しており、その紹介で当地に來たものである。農業経営はこの紹介者を含めて3家族共同で行っており、トラクターを新たに購入するなど積極的な投入を行っている。外来の漢族は農地市場を通して借地をするのではなく、こうした人づてに農地を借りることができる場所に移動してくる。黒龍江



では3垧あまりの農地を請け負っており、さらに借地をしていたが、農地は限られ、借地代も1畝400元ほどであった。

当地は降水と農地がよくて、借地も多くでき、暖かい。この農家の聞き取りで得た延吉農村の評価である。農閑期となる12月には黒龍江の実家に帰り、春節が過ぎたら戻ってくるという出稼ぎ的生活であるが、長期にわたって当地で農業経営することを考えているとのことであった。当地で住んでいる家は、月100元で借りており、たいへん安価とされる。東盛涌鎮では空き家が多く、無料で貸し出す農家もあるし、家を買った外来の漢族もいるとのことである。彼らの来住は、小隊（村民小組）で認められれば、大隊（村民委員会）は追認しているとされる。

東盛涌鎮と涼水鎮に来住している漢族農家に共通しているのは、まず地理的には、出身地が東北地域であることがあげられよう。黒龍江から来た農家は19世紀に、「闖關東」で山東から移住してきたもので、移民としての移動性が基盤にあることをうかがわせる。延吉農村の来住者の送り出し地域については、2010年人口センサスにおいて、その概要を把握することができる（第5図）<sup>9)</sup>。



第5図 延辺朝鮮族自治州への来住者の前住地

資料：《延辺朝鮮族自治州2010年人口普查資料》2012年

来住している漢族農家の共通点を農業経営についてみると、それが大規模に行われていることが挙げられよう。涼水鎮の農民は、トウモロコシを中心とした農業で十分な収入を上げるためには、1農家で10垧（10ha）の農地を経営することが目安であるとする。また東盛涌鎮でも、大規模な経営をする漢族は村落内外の農地を10垧以上は経営しているとされる。すでに中国東北地域の農業経営はかつての大規模性を弱めており、故郷ではそもそも農地を借りるのが難しく、同時に借地代が高いのに対して、朝鮮族が流出している当地であれば、10垧以上の農地を

容易に得ることができるのである。

このように外来の漢族に着目すると、彼らが移住してくる条件は揃っているように見えるのであるが、定住には戸籍に連動する農地所有の壁がある。涼水鎮のある村長は、朝鮮族は出稼ぎによる収入で暮らし、漢族は農業生産による収入で暮らすという棲み分けを語りつつ、外来の漢族は限られるし、当村の人たちを守らなければならないとする。これは農地の経営の流動化と外来者が住民となること、すなわち外来者に本村の戸籍を与えることを切り離すという意味が含まれている。この村での農地請け負いは1996年に行われたもので、2027年までの30年間の契約が行われている。もし外来者に戸籍を与えれば、10年ほど先に行われる請け負い農地の再配分の対象に加える必要が出てくるのである。さらに東盛涌鎮でも、外来漢族に戸籍を与えることに村民は反対しているとされ、村民による集団経営式の大農場の構想が実現すれば、外来者は帰らなければならないとする意見も聞かれた。

## 5. おわりに

延吉農村のコミュニティ・スタディを行った林梅(2014)は、村落自治を歴史的に位置づける詳細な作業の一環として、流動化する現代朝鮮族集落においても、「留守」システムと呼ぶ自律性が機能していることを指摘している<sup>10)</sup>。戸籍制度に象徴される居住と移動の制限が、朝鮮族村落を支えている側面に焦点をあわせており、教えられる点が多い。同時に戸籍制度の身分的な問題性と、急速に都市化する社会変化をうけて、「出稼ぎ」を生む構造そのものの解消が次第に明確になる中、農村の衰退あるいは持続可能性をいかに考えるべきか、新たな課題があることにも気づく。地域として延吉農村をとらえるならば、朝鮮族と漢族のゆるやかな共生が現実的な選択肢となってゆくと考えられよう。

本研究課題は、JSPS 科研費 24401035, 15H05169, 16H01963 の助成を受けたものです。

(京都大学大学院人間・環境学研究科)

### 注

- 1) 延吉農村の概観にあたっては県志を参照した。吉林省延吉市地方志編纂委員会編 1994.《延吉市志》新華出版社。
- 2) 耕地面積統計は、集団化期に漸減しており、1978年の4.1万haから1980年に3.1万haに急減している。この理由は不詳であるが、この時期に行政区画再編は行われておらず、畑が0.7万ha減少していることから、非集団化の移行に際して雑穀栽培の行われていた不安定農地を統計から削除したことが考えられる。また、1980年以降も耕地の漸減傾向は2003年まで続いている。龍井市統計局編 2010.《奮進的龍井》, p.41。
- 3) 朴美蘭 2010. 20世紀90年代以来延辺朝鮮族人口負増長原因探析. 東疆学刊, 27(1), 55-63。
- 4) 権香淑 2011.『移動する朝鮮族—エスニック・マイノリティの自己統治』彩流社。朝鮮族の移動史については205～247頁。

延吉農村における朝鮮族の移動性と農地の流動化（小島泰雄）

- 5) 龍井県地名委員会編 1985.『龍井県地名志』。
- 6) 「龍井県行政区劃歴史沿革」, 前掲『龍井県地名志』, pp11-13。
- 7) 延吉農村の集落研究として, 佐々木衛・方鎮珠 2001.『中国朝鮮族の移住・家族・エスニシティ』東方書店。
- 8) 前掲《延吉市志》, pp.137-138
- 9) 延辺朝鮮族自治州統計局・第六次人口普查領導小組弁公室編 2012.《延辺朝鮮族自治州 2010 年人口普查資料》第四冊, 延辺朝鮮族自治州統計局, pp.2671-2690。ここで前住地とするのはは 5 年前常住地のことである。
- 10) 林梅 2014.『中国朝鮮族村落の社会学的研究－自治と権力の相克』御茶の水書房。とくに第五章「国境を越えた労働移動にともなう村落における「留守」システム」, 115-137 頁。